

2011年9月22日
コープさが生協
組織企画グループ 発行



村上先生のお話は
とてもわかりやすく
て好評でした



9月10日 第一支所では22名の参加



9月12日 三日月ゆめりあでは28名の参加

6月の通常総代会で、組合員より、玄海原発への対応や、原発による放射線についての学習の要望が出されました。各エリア委員会の希望で9月10日第一支所、9月12日三日月町ゆめりあにて学習会を開催しました。10月17日にも第四支所にて開催予定です。

講師は、2009年度唐津エリアの玄海原発プルサーマル学習会でも講義いただいた佐賀大学名誉教授の村上明先生にお願いしました。

福島での原発事故のあと、日本中の人たちが放射能への不安をかかえる中、原発の安全性、放射線の安全性を巡っては、さまざまな情報があり、正確に理解することが難しい状況となっています。そこで、今回の学習会は、原発と放射線に関する基礎的な知識をきちんと持ち、科学的に考えることで、風評に惑わされないで判断できるようになることを目的として開催しました。

〈参加者アンケートより〉

●低レベルの放射線被ばくの影響は科学的にも解明できていない・・・この事実をどう受け止めて判断するか、どういう行動をとるかは、自分自身の価値判断しかない。ということでした。今後データの蓄積をどのようにしていくのか、国の動きとかが気になります。

●放射線のことは今日のお話でむやみに心配することはないことはよく理解できましたが、やはりできるだけ避けたい。マスコミ報道に踊らされない程度の知識は持っていたいと思いました。

●原発のシステムから安全性、人体への影響など広範囲にお話し下さって疑問点が整理されました。

●曖昧にしか理解できていなかった放射線について、今日はお話していただき良かったと思います。子どもたちもテレビを見て「大丈夫なの？」と心配していただけに帰ってから答えられる分は答えてあげたいと思います。ありがとうございました。

●原子力の話をわかりやすく話していただきありがとうございました。子供を持つ親として放射線の人体への影響が気になるところです。内部被ばくによる発がんリスクが、たばこ、紫外線によるリスクとあまり変わらないことを知り、少し安心しました。さまざまな情報が流れている中、冷静に科学的な検証がされているか、見極めていかないとと思いました。

当日は、講義の後たくさんの疑問質問が出され、みなさんの関心の高さがうかがわれました。当日のアンケートで出された質問に答えた「Q&A」を別紙に載せていますので、参考にしてください。

2011年9月22日
コープさが生協
組織企画グループ 発行

放射線の人体への影響について

●ベクレル(Bq)とは：放射性物質(放射能)の量を表す単位。対象とする物質の中に放射性物質がどのくらい含まれているかを知る目安となる。食品等では通常1kg当たりで示される。

● Sv(シーベルト)とは：放射性物質から出る放射線を浴びた人体が受ける影響の大きさを表す単位。年間当たりのミリシーベルト、1時間当たりのマイクロシーベルト(ミリシーベルトの千分の一)などで示す。

●放射線被曝による確率的影響について

放射線被曝が100mSv(ミリシーベルト)の時、がんによる死亡者数は確率的に約0.5%増加するとされている。余分な放射線被曝がない場合、日本人の約30%はがんで死亡している。1000人が100mSvの被曝をした場合、確率的にはその1000人のうちの約305人が「がん」で死亡する。放射線被曝が100mSv以下の場合、統計学的には、放射線被曝による影響と喫煙などの生活習慣の影響との区別が難しくなる。

◆ 被曝放射線量とリスク

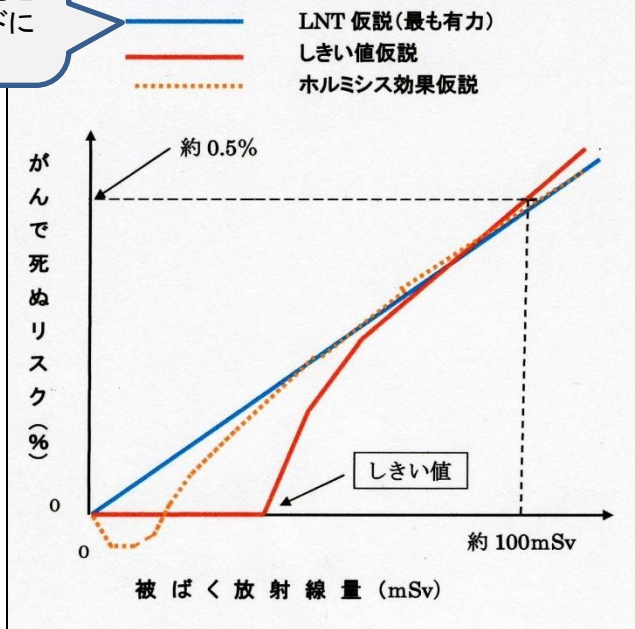
約(100~200)mSv 以上 …… がんの発生確率が被曝線量に比例して増える。

(科学的に実証済み)

約(100~200)mSv 以下 …… 科学的に確定したデータはないのではっきりとはわかっていない。

100ミリシーベルト以下の被ばくでも影響があり、その影響は放射線量に比例すると仮定する、より安全サイドにたった考え方が有力

低線量放射線の人体への影響



■ 低線量被曝領域(約100mSv以下の領域)での影響

- 約 100 mSv がんによる死亡率が約0.5%増えるとされる。
- 約 100 mSv 以下 はっきりした科学的なデータはない。
- 約 2.4 mSv 自然界からの年間被曝線量(世界平均)
- 約 1.5 mSv 自然界からの年間被曝線量(日本平均)
(県によって最大約0.4mSvのばらつきがある。)
- 1 mSv 一般人の年間被曝線量限度*
(医療と自然放射線被曝は除く。)

(ICRP: 1mSvは5年間での平均でひとつの目安)

* 線量限度は安全か危険かの分かれ目の基準ではない。また、そこまで被曝してよいという意味ではないので不要な被曝は避けるべきである。

→必要な被曝、不要な被曝の区別は？個別の判断で

講義のまとめ

- 原発の安全性に関しては、「起こりえない事故」、「想定不適當事故」も確率論的に考え、「確率論的安全評価」手法に基づき、

(事故の起きる確率) × (事故による被害の大きさ)

で安全評価をすることが重要である。

- 原発の安全性に関する実験データや測定結果には科学的な検証と再現性のチェックが不可欠である。
- 放射線被曝の線量限度は安全か危険かの境界値ではない。
- 放射線被曝の安全性については、正しい理解と他のリスク要因も考えに入れるなど冷静な判断が重要である。
- 安全 or 危険の二者択一的な考え方は非科学的である。
- 自分に適した基準を自分が設定し、安全かどうかはそれにしたがって判断する態度が望ましい。